芽接ぎの詩集 (6)

1 3

「草の葉」詩抄 (V)

冨　田　義　介

4 3

古今東西の僧よ聖よ，われ汝らを軽んぜず。

わが信心に宗門の大小なく，すべてを容れて疎んぜざるが故なり。

われ死んで五千年，またこの娑婆に来たるべし。

来りてかしこみて祝女(みこ)のことばを待ち，なべての神を恐れ，太陽神（ヒルメノムチ）を拝がむべし。

まづ手にふるる石神（イソノカミ），まづ手にてうつ樹株（コカブ）の神，いやちこなるべし。かたみに杖をとりもちて禁厭(まじない)の踊りをおどるべし。

来りて亦わがことは，バラモンの僧，ラマの僧らと霊廟の灯火の芯(しん)を無心に切るべし。

来りて亦わがことは，衝き立つ摩羅（フナド）の神の裸祭りの行列に居るべし。インドなるヨガの行者と共に居るべし。

来りて亦わがことは，蜜酒を髑髏に盛り，飲みながらシャスタラを誦し，ヴェダを読み，またコーランを読むべし。

亦わがことは，犠牲(いけにえ)の血のはだらなる豊岡の神の斉庭(ゆには)に蛇皮鼓もち，うちうちて舞うべし。

来りて亦わがことは，福音の書を拝みて読み，はりつけの耶蘇を敬まうべし，耶蘇は神の子にいますが故なり。

来りて亦わがことは，ミサにゆきて跪づき，クェーカーの会堂にゆき，起ちて祈り，坐りて信者の感話をきくべし。

来りて亦わがことは，友の会の人々と祈りすすむや，神の気に憑かれて皆泣き叫び狂うべし。狂いて死にて倒れ，ややありて蘇り来るべし。

来りて亦われ，ふと見れば舗道の走れり，円形国土の外円なり，そのまた外なる国土も見ゆ，外円も見ゆ。
来りて亦われ，見十方諸仏世界の三昧にあるべし。
われその系の一つに居り，法輪を転じて空空の詩を作り，衆生のために虚妄(こもう)の見を脱がれしむ。

疑いて惑う人よ，惑いて仲間はづれとなりし人よ，心かなしみて力なくなりし人よ，たわくる人よ，楽しみなき人よ，怒りもちてある人よ，人を軽んじている人よ，心ふさぎてある人よ，神いまさずと云う人よ，
われ汝らを拒まず，汝らを斥けず，ことごとく汝らの苦患(くげん)を知るが故なり。

巨鯨(おお)，銛(もり)を射たれき，ふびんなるかな！
体をねじりて稲妻のごとく水中を走る，苦しみて走る，うめきて走る，血をふいて走る，あわれと言うもおろかなり。

惑業(わくごう)の太銛を負うてこの世に生くる者，みなみなかくのごとし。われ人々の苦を抜きて楽を与えんとこいねがう。
いざやわれ，到る処にて人々の仲間とならん，なりて銛を負わん。
過去の世は，君と吾と人々と等しく銛を負うて登りきたりし坂道なり。
未来の世は，君と吾と人々とひとしく銛を負うて登らんとする坂道なり。

来世のことは，われ知らず。
しかれども，負うべき銛は来世にも有りて重かるべく，登るべき坂は来世にも有りて険しかるべし。

神は銛を負うてゆく者すべてを労わり給い，また途中にて休む者をすべてかえりみ給う。摂取不捨(じゃ)なり。

神は，死にて埋けられたる若者を見捨て給わず，
神は亦，若くして死にしかの若者のそばに埋けられし若妻を見捨て給わず。

神は亦，生れんとして生れ得ず，死にし嬰児を見捨て給わず。
神は亦，為すこともなく老い朽ち，しんしんとして後悔ゆる人を見捨て給わず。
神は亦，ラム酒をのみし重症の施療患者を見捨て給わず。
神は亦，むざむざと命をすてし数多き無頼のやからを見捨てたまわず。
神は亦，口開けて漂いながら食物（もの）を吸う海鞘（ほや）にも 似たる 無能の 人をも 見捨てたまわず。
神は亦，土中のもの，古墳の中のもの，すべてをさらに見捨てたまわず。
神は亦，大千世界の何物も，亦これに住む何人も，見捨て給うという事なし。
神は亦，現存のもの，微細のもの，一つとして見捨て給うという事なし。

4 4

這箇（この）超越底を君に語らん――起ちて語らん，起ちて聴きたまえ。

意識をもって意識せしもの，総べてを我れ捨てて，捨てて，捨てきるなり。
空空の中に，残る所の男のまぼろし女のまぼろしの仏を率い，進みてゆくなり。

われらの歴史は既に洹河の砂の数ほどの歳を費しきたりき。
而もわれらの前途には費すべき洹河の砂の数ほどの歳があるなり。

年々に生れいでたる種々（くさ）のものに依りて，この世は富みて栄えたり。
年々に生れくるべき種々のものに依りて，この世は富みて栄えゆくべし。

生れ来たるものに勝劣あるべからざるなり。
生れ来て時と処を占むるもの亦勝劣あるべからざるなり。

兄弟よ，姉妹よ，人々に危害を加えられたりや。人々に嫉まれて憎まれたりや。
われ空空に住す，曽て危害を感じたること無し，われ空空に住す，曽て人々の憎しみを覚えたること無し。
（悲しみと歎きと我れにおいて何んの関わるところぞや？）

過ぎたる世々の仏たち，われにおいて極まり，来らん世々の仏たち，胎蔵されてわが中にあり。

今わが歩む一足は，五百由旬の階梯を登り詰めたる段階なり。
一足ごとに過去の世の歴史を負うて登りゆくなり。
返り見すれば，登りつめ登りつめ来し段階の相重なりてその果知らず，然れども猶いや更に登りつめ登りつめ行かんとはするなり。

うしろを見れば，まぼろしの歴史のうねり，うねうねと起伏して
天地(あめつち)の開くる前の太冥に到りてこれに続く——彼処(かしこ)にわれ曽て在りき，
彼処に隠れてわれ待ちき，忘れ河原の忘却の霧に包まれて待ち待ちき，ねむりねむりて待ちわびにけり，
急ぐことなく待ちけるが，朽ち腐れゆく草木に害さるること更になかりき。
霧に抱かれて久しくを，幾久しくを，われ待ちにけり。

われ，たやすくは生まれでざりき，五百由旬の苦しみを経て生(あ)れいでしなり，
われ産ましめんと助産の手，いとねんごろに延ばされき。

限り無き歳月，揺籃にのせてわれを送りき。陽気者のボートマンら，漕ぎ漕ぎつぎてわれを送りき。
あまたの天体，軌道をねじりてわれを通したるのみにあらず，
その力をわが揺籃(ふね)に寄せてわれを護りき。

わが乗る揺籃をまもらんと，星雲かたまりてこれを包みしのみならず，
ややややに平たくなりて，わが乗るフネをその上に載せたりき。
やがて数多の恐竜つぎつぎに現われ，その口にわが居るフネを含み，行き行きて安らかに置きたりき。

その後もなお，すべての力集いきてわれを助け，われを運び，今此処に斯くの如くに，
わが魂と共に，われ在ることを得しめき。

4 5

ああ，うつそみの生きの盛りよ！生き敢(か)つ力張り張りて緩まず。
ああ，うつそみの生きの盛りよ！力足をふみしめて健かに歩む。

愛(うつく)しみて慕い寄る仏たち，その数知れず。
集い来て口吸いを迫る仏あり，まぼろしに立ちてわが肌の毛孔に滲み入る仏あり，
人込みの中に犇(ひし)めき寄り来てわれを押す仏あり，小夜更けて裸になりて夜這い寄りくる仏あり，
昼は河原の岩に立ちカーカーと鳴く烏の仏あり，蒼空高く舞いながらピーロピーロと呼びかくる鳶の仏あり，
夏野の河より，熟れたる林檎の畠より，紅葉せる片岡の林より，われに物言う小鳥の仏たちあり，
かにかくにかの数知れぬ仏たち，玉究(たまき)わるわれの命に光彩(ひかり)あらしむ，うつせみの命ににじむ口吸いをなし，
音もなくこの仏たち，心臓の紅き血をすくい，これ取りて君が血となし給えとわれに言うなり。

老いの日は堂々としていで立ちきたる，よくこそ来れ，わが死ぬる日を我れうるわしみこそ思え。

尽くる無きの因縁生起，三世に連りて一如なり，自他に連りて亦一如なり。
無尽縁起というはこれなり。真理（サチヤ）というも亦これなり。

小夜更けて大千の世界をみる。銀河宇宙は隅の隅なり，その亦隅の片隅にクモノスのごときものあり，
太陽系といふはこれなり。太陽すらだにも塵の亦塵なり。

小夜ふけて窓をあけて見る。大千の世界ひろがり，ひろがり，亦ひろがりて限り知られず。

わが太陽にはその亦太陽ありて静かにこれをめぐる。
その太陽には亦その伴侶(とも)らありて，各々ヨリ大いなる円を描いてめぐる。
その外方(そと)には亦いやさらに巨いなる太陽のグループあり，内方(うち)なる太陽は塵の塵なり。

止まらず，止まるなきの拡がり亦拡がりなり。
我と汝と十万億土とその表亦その裏なるものの総べてが，たとえ一瞬にして星雲となるとも，時を経れば亦亦元(またまた)の如くなるべし。
われら必ずわれらが今その中にある有りさまを再現すべし。
われら必ずわれらが退きし分を埋め尽し，亦亦元のごとく進み進みて行くべし。

46

ああ，我がことといと久しくも亦いと遙けくも歩み来たりけるかな，この後の旅亦測り知るべからず。

我れとこしえの放浪(さすらい)にあり，（来りて聴け人民よ）
我がことの目印は雨合羽と兵隊靴と生々しき棒杙(ぐい)の杖なり。
一人(にん)の友といえども我が椅子に憩う者なし。
我がことは椅子一つ持たず教会も持たず哲学も持たざるなり。
我がことは人を連(つ)れて饗宴の会に行かず，図書館にも亦取引所にも行かず，
左の手をわが友の腰に懸け持ちて，
男となく女となく友を卒いて片岡に登る。
乃ち右の手をあげて広漠たる大地の風景を指差し，亦平らかなる大道を指差すなり。

この道は，われの，亦余人の，行くべき道にあらず。
汝が，汝自らにして行くべきの道なり。

道は遠きにあらず，近きにあるなり。
惟(おも)うに生れてこの方 汝等の歩み 来ながら，その事に気付かざりし「平常心是れ道なり」。

されば この道は何処にも在るなり，海にも在るなり，陸(おか)にも在るなり。

いざ行かん，急ぎ汝の着物を肩にして発て，わが子よ。われ亦わが着物を担(かつ)がん，いざ我等急ぎ発つべし。
われら行く行く，壮麗なる都市と自由なる人民のまぼろしを見るべし。

汝もし疲れたれば双の荷物われに任せ，汝の霜焼けの手をわが 臀(いさらい) に載せて暖めよ。
暖め了りなば，わが霜焼けの手を汝の臀に載せて暖むることを許せよ。
ひとたび出で発ちし我等は，しばらくも休むことをせざるが故なり。

今日夜明け前，われ起きて片岡に登り，星影しげき大空を眺めつつ，
さてわが霊に云う状(さま)は，「我等もしこれらの天体とこれに関する一切智の包摂者となりたらんには，満ち足りて歓喜の天となるべきや。」
わが霊の云う状は，「さにあらず，我等只一つの坂を越えて次の坂にとり掛かるのみなり。」
汝尚いろいろと訊ねたき容子なり。
されど我れ汝に答えず。汝自ら知るべし。

親愛なる君よ，しばらく此処に坐り給え。
これなるビスケット，これなるミルク，食いたまえ，飲みたまえ。
されど着物にくるまりて安眠をとるや，直ちに我れ汝に別れを告げて最后の接吻(くちづけ)をなし，戸を開けて汝を出で立たしめん。

久しくも君，見下げ果てたる事どもを夢想し居りたるものかな。
いざや我れ，君の目糞をきれいに拭いて呉れん。
ぱっちりと眼を見開き，何ん時太陽を見ても眩(めまい)せぬよう，眼を慣らすこと肝要なり。

久しくも君，溺れんことを怖れ，板にしがみ付き，海辺(べた)を離れざりき。
今よりぞ我れ，勇気ある泳ぎ手と君を成さん。
勇ましく海中にとびこみ，ぬっくと頭を上げ，顧みて我れに頷き，大声をあげ，笑い

ながら髪を流して泳ぎ進むことを得せしめん。

47

わがことは競技者のコーチなり。
師匠につきて之に勝る記録を作りし者は師匠へのご恩返しなり，
我れにつきて我れを破りし者はわが技法第一の誉れとなるなり。

愛する若者よ，君が男となるは他力によって成るにあらず，ことごとく自力によって成るなり。
君もし徒らに雷同し，或は徒らに恐怖せんか，善人はおろか悪人となるなり。
愛する若者よ，君が彼女を愛しビフテキを嗜食する時，君ははじめて男となるなり。
愛する若者よ，君が軽べつに或は片恋の悲しみに腹を断つ時，君は始めて男となるなり。
愛する若者よ，君が乗馬一番の名手，けんか一番の強の者，射的一番の射手，ヨットの，シャンソンの，或いはバンジョーの名人となる時，君は始めて男となるなり。

亦かくの如くにして，髯面（づら），傷面（づら），くすりを塗っても塗りきれぬ程のあばた面を好む者と君がなる時に，
亦日蔭に居りて色蒼白くあるよりも日向に居て色のくろきを好む者と君がなる時に，君ははじめて男となるなり。
速かに我れを離れて行けと我れ君に言う，されど一人（にん）として敢えて離れて行く者なし。
今より後，君何処に居ると雖も，我れ君の後ろを追いて行くべし。
わが言うことの解るまで，耳が痛くなりても君に言うことを我れ止めず。

金のために，はた亦渡し船を待つ間（ま）の閑潰（ひまつぶ）しに，かようの事を申すにあらず。
これは我が言うことなれど，君の言うことにてもあるなり，この舌はわが舌なれど君の舌の役目もするなり。
君の口中にては動かず，我が口中にては動きだすなり。

断じてわれ，戸外に非ざれば，愛を語らず，死を説くことも無かるべし。

断じてわれ，心のみを以って心に伝うること無けん。伝うるは只戸外に出で，打ち明けてわれと語る男女にばかりなり。

汝もしわが言うことを解りたくば，出でて片岡に上るべし，出でて海辺(べた)に来るべし。
目の先に飛ぶブヨ，足下に散るしぶき，以心伝心の方便に非ずという事なし。
木槌，櫓かい，鋸ぎり亦わが方便に非ずという事なし。

ガラス戸を入れたる室(へや)，或は学校などという物さらさらに以心伝心の方便となるべからず，
むしろ学校へ行かぬ悪童，幼児などこそに最勝の方便はあるなり。

工場に働く若者，最も親しき入魂(じつこん)の友なり。
鉞(まさかり)と茶瓶を携えて山に入る樵夫は，終日(ひねもす)われと共に居るなり。
畑に鋤を入れて農園に働く若者は，わが声を聴きつけて悦ぶ。
帆をあげて行く船には，必ずわが声も乗りて行くなり。漁夫ら水夫らと，われ同じ船に乗り，愛(うつく)しみて彼等と語る。

野営中の兵隊，行軍中の兵隊，兵隊はすべてわれの友なり。
激戦の日の前夜，兵隊あまた我れを尋ねて来る。われ愛しみて会わずという事なし。
（彼等皆その夜限りの命ならん，穴あわれ。）

猟人(かりうど)ひとり毛布を着て山に眠るや，われ行きてその顔に頬擦りして愛しむ。
荷車を駆る者，わがことを想うてガタゴトと車の跳るも覚えざるなり。
子持ちの若き女，子持ちの老いたる女，たやすくわが言うことを解するなり。
彼等みな，曽てわが言いし事を思い出で，しみじみと我がことを愛しむらし。

48

爾(なむぢ)もし一切の空を證(さと)らば，心身まことに一如なるべし。
爾もし真如一実の実相を観ずれば，性(せう)相まことに不二となるべし。是れ既に述べたり。

身にとりての最勝のほとけは，色身(しきじん)に坐(ま)すところの菩提なり。

このさとり無くば，なむぢ生ける屍なり。その著物なむぢの屍衣(かたびら)なり。その歩く体は爾の屍体なり。歩いて墓所へ往くところなり。

凡そ深(じん)密を会(え)解(げ)する者は，たとえ半箇の銭は無くとも，仏果を得て海印(かいいん)の光を観るべし。——荒海や，佐渡に横たふ天の川。

たとへ眼(まなこ)に，文字無しと雖も，惑(まどい)を断ちて仏国の荘厳を観るべし。

何事の業にてもあれ，若者よ，至心に業に游ぶ者は，そぞろに真諦の楽夢を見るべし——ひるがほに米つき涼むあはれ也。いと物深し。

鳥獣・虫魚・瓦石(がしやく)・草木——何れの一つも金剛の大力の菩薩なり。——向日葵は，金の油を身に浴びて，ゆらりと高し，日の小ささよ。

男の一人，女の一人も亦又かくの如し。一臂をもちて能く全天の宇宙を支うるアトランタなり。

個は全に，全は個によって支えらる。この真理（サチヤ），よく證(あき)らめて覚悟あるべし。

諸法は無我なり，諸行は無常なり。全をはなれての命無し。個をはなれての命亦無し。このいのち，よく證らめて大いなる自覚あるべし。

仏奈箇（いかに）と言うなかれ。如来奈所（どこ）ぞと言うなかれ。

ほとけは，すべて箇の中にあり。自(じ)内證の月の影なり無心てう盥にうつる月の影なり。

ほとけは祇是者漢(たゞこれこのおとこ)のみ。生をあきらめ死をあきらめし是者漢のみ。眼にうつる月影を見よ。

黙照すれば，ほとけにあらぬ物一つ無し。狗子(いぬころ)は狗子のほとけなり。

仏(ぶつ)我に在り。おのれ亦おのれのほとけなり。

黙照すれば，目暈(まかゞ)ちて見ることを得ぬ光，又々このほとけ，最勝の仏なり。

昼はひねもす，夜はよもすがら，われ回向(えこう)して如来に触る。

おとこの顔に如来をみる。をなごの顔にも如来をみる。鏡に映るわが顔に如来亦ましまます。

道を歩けば草の葉あり。皆如来が印鑰(いんにやく)を置きし文（ふみ）なり。

我れこれを拾わず，亦読まず。

我が後の次々の世の人々の読み継ぎ行かんことのためなり。

4 9

なんぢ死よ，なんぢに憑かれて人みな死ぬ。されど，われ汝を怖れず。

惟うに汝は産科医なり。地母の産所に呼ばれて行く。地母(ガイマア)の腹を圧さえ，出づる児を掌に受けてひたす。

しなだりの地母の陰門(ほと)に顔寄せて，われつばらかに，これを見る。やがて地割れ，ふくらみて芽は立ちて出づ，ここに，かしこに。

死にたるおなごのむくろを見る。これやがて草木に吸われて養分(やしない)となる。白ばらの花もこれによりて開く。青きメロンもこれによりて熟す。

われ幻の花に口吸いし，死にたる婦の唇を想う。われ幻のメロンをむだき，死にたる婦の乳房を想う。

なんぢ「生」よ，生ある物みな死にて滅びし物より出づ。

（いくたびか死にて生れて，生れて死にて，うつそみのわれ亦此処に在るなり）

それぞれに生くる命の勝劣を，われ敢えて問わず。

因縁の生起によりて一処に生れ一時を支えて生き，生きて創る価なれば，各一門の別徳なり。何すれぞ，その善悪を論ぜんや。

ここにおいて一門即普門の知覚あり。

討つ者も討たるる者も，随縁の真如なり。

斬る者も斬らるる者も，随縁の如来なり。

嫉む者，嫉まるる者，亦かくの如し。

四大元(もと)主無し。五陰(このこゝろ)本来空なり。覚め来り首を以ちて白刃に臨めば，電光影裡春風を斬るのみ。

過ぎたる世々の仏たち，われにおいて極まり，

来らむ世々の仏たち，胎蔵されてわれに在り。

われ履みて今歴史の階段をのぼる。今のこの一足は最勝の一足なり，最上の一歩なり。
一日にして能く百年の歴史をつくる，能く千年の価を又々創くる。
今のこの一足まで，無量の劫をのぼり来たりき，しかあれど更に行くべき無量の劫あり。

返り見すれば，わが後に，幾段々の人の影あり，頭を垂れて立つ。
見はるかす下方の段には，天地(あめつち)の剖(わか)るる前の常闇(とこ)あり。曽て彼処に我ありき。
すやすやと睡(まど)ろみながら，ゆるやかに，胎蔵界を運び継がれき。
大悲万行，あなかしこ！これによりて，我運び継がれき。
恙(つゝが)なく五百由旬を運び継がれき。大悲胎蔵生というは，これなり。

返り見すれば，千仏万仏，うらげたる舟人の如く，漕ぎ漕ぎ回(た)みて我を運びき。
大悲万行，あなかしこ！

星はその軌道を守りてわが行く途を妨げず。更にはその霊力(くしび)を送りて，平らかに我が舟を行かしめき。
われの菩提をひたすものあり，太初より育（ひた）しもちてゆくビルシャナのかなしみなり。大悲胎蔵生の菩提は何物もこれを遮(さまた)げず。
四大，これがために，落つる間(ひま)なく供養したてまつる。

かくの如くにして，此処に今われ在るなり，菩提とともに此処に在るなり。見よ，この立てる者，金剛の薩埵なり。

50

如来はロゴスなり，智慧なり，光なり，――不可得底の奈一物（なにものか）なり。
わが色身(うつそみ)の中に坐ます。

身を捻ぢて大汗を発す。ややありて，総身(じん)冷えて動かず。つらつら眠る。

覚めてわれ悟りに入る。曠廓として十方空なり。

空，空にして空ならず。不思量底のなにものかあり。ここに在り，われに坐ます。
されど名づくべき言葉もなし，示すべきシンボルもなし。ロゴス，ことば，真理，提婆，涅槃というも疎(おろか)なり，空，無，真如，菩提というも亦亦疎なり。
是故に「不立文字」「唯證相応」と申す。

万法来りてこの證の上に会(え)す。親しみて皆我れに入る。
我れ親しみて亦万法に入る。相(かたみ)に即(そく)して一如となり，豁然として大覚す。
われ即身にロゴスを聴く。
このロゴス，万法のロゴスなり。
大空の星のロゴスなり，太陽のロゴスなり，墓所の草のロゴスなり。
これによりて因縁生起の実相を観る。覚了すれば十方空なり。
時雨せし林の中の泥(どろ)水にうつる浮き雲，ロゴスを放つ。無尽縁起の実相のことばなり。
夕されば風吹くなべにうらぶれて傾ける月，ロゴスを放つ。無尽縁起の実相のことばなり。
野分きして草倒れ雨にぬれて光る。光りてロゴスを放つ。
凩(こがらし)に吹かれて樹々の枝枯る，日に白く光り，風に揺られて泣く，泣きてロゴスを放つ。

これに由りて，われ月明に時空(じくう)に游ぶ。
大地を離れ，うるわしき月光の菩薩に近づく。この菩薩は大日如来の脇仏なり。
見はるかす親の如来の中台へ，ロゴスに由りて，われ更に飛ぶ。

5 1

過去の波は既にくづれて去りぬ。現在の波も亦くづれむとす。生去死来(せうご)し，尽くる無きの因縁生起す。
起れば即ち頽る。頽れば即ち起る。止まることを得ず。わがことの波も亦くづれむとす。

されば善男子(をのこ)よ，亦善女子(めのこ)よ，来りて不審をわれに訊ねよ，憚らず訊ねよ。
われすでに人生の夕暮に居る。光年いくばくを餘さむや。
悩みもし有らば，つばらにきけよ，早くたづねよ。我事すでに過ぎなむとす。

「われ永生を得たり」「我事すでに過ぎなむとす」と言うは奈何(いかに)ぞ，矛盾せり，とて詰じる者あり。
まことわが言(こと)撞着す。空空にして得る所無し。
無極の旨帰(き)は言語(ことば)をもちて示さむに由なし。

われ，ひたぶるに，衆生に回向す。戸口に立ちて人を待つ。

彼処に立ちて聴く人よ，何事の苦しみ有りや。われ此処にあり。
仕事を了えていち早く帰るは誰ぞ。我此処にあり。夕餉を了えていち早く来るは誰ぞ。
　われ此処にあり。

来りて共に連れ立ちて歩くは誰ぞ……。われ此処にあり。

われ去り逝かば，その悩み語るすべなし。一期(ご)一会(ゑ)の因縁なり。遅れ来て後悔(のち)ゆるも詮なし。われ此処にあり。

5 2

斑(ふ)のある梟(ふくろう)，飛び降り来り云う状(さま)は「汝が饒舌(ねう)聞きぐるし，汝が道草見苦しや。」
答えて我の云いけるは「あなうたて，梟よ，我は是れ人間の自然虚無身(じねんこむしん)なり。汝が梟のそれなるが如し。
「我は人間の訛声(だみごゑ)をはり上げて啼く。汝が梟のそれもちて啼くが如し。」
「我がだみ声の地唄は，汝が放つだみ声の如し。屋根屋根越えて十方に拡がる。」

日は暮れなづみ，雲光る。疾く復(かへ)れとて待つにやあらん。野に立つ我を待つにやあらん。

斜めにうつる物の影，影，影――我が影もうつる。暮れなば消えて，みなその本に復る。

我が発(た)ちし本の仏に復りて消えん。
白雲の髪を散らして，色身(うつそみ)を風に撒(ま)いてぞ，復(かえ)りて死なめ。大日如来(ビルシヤナ)に復りて死なめ。

この身を埋めて土となり，若草の葉とわれ萌えて出づ。去りなむ後に会いたくば，穿てる靴の下を見るべし。

靴の下なる草の葉に，我居るというは，不思議なるべし。しかあれど，遍一切処仏即(ビルシヤナ)ち我者(がじゃ)にあらずや。
是故に我は一切の処に居る。居りてあまねく衆生に回向す。
衆生のいのち，これに由りてまたけく，衆生の血，これに由って染着なきを得るなり。

善男子(をのこ)よ，亦善女子(めのこ)よ，汝らも亦回向せよ。回向して我を求めよ。
ただひたぶるに我を求めよ。随処に居りて，われ汝らを待たん。
随処に居りて，われ汝らを待たん。

〔終り〕